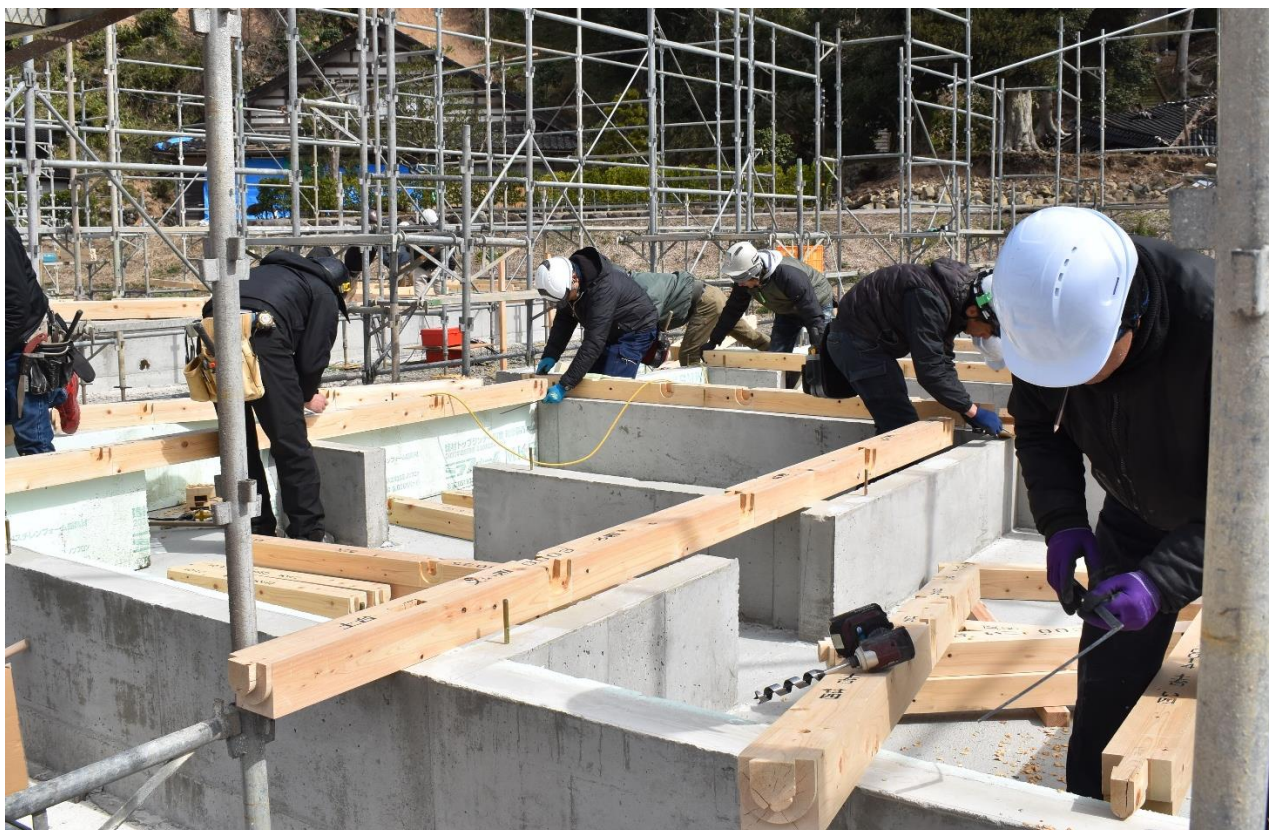


令和6年能登半島地震 災害対策ニュース

南志見・町野の2現場で大工工事開始

石川県連・松本会長からも激励



土台敷きから始まり順調に作業を進めていく(南志見)

令和6年能登半島地震における応急仮設木造住宅の大工工事が3月18日にスタート。輪島市の町野グラウンドゴルフ場(268戸)、南志見多目的グラウンド(100戸)の2現場に北信越地協の仲間約100人が就労しました。

当日は気温が2～3度で時折雪がちらつく天候となりましたが、本災害における全木協として最初の大工工事開始ということもあり、就労者は緊張の面持ちながらも、スムーズに出勤簿の記入をするとともに、両現場で対応を求めているCCUSカードのタッチ(就業履歴の蓄積)が行われました。

朝礼では幹事工務店から作業内容の説明、地元石川県連の松本会長からの激励の挨拶



入場時にCCUSのカードタッチをする就労者

(南志見で対応)があり、「ここまで大変時間がかかったが、大工工事をやっと開始することができた。集まった仲間にも感謝申し上げたい」と述べました。

初日は、両現場ともコンクリート基礎の上に木材を設置する土台敷き、コンパネを貼る作業工程を実施。就労者のほとんどが初めて

顔を合わせる仲間同士の中にあっても、テキパキと連携を取りながら、順調に作業を進めていきました。

梧桐さん「思いを込めていい家に」 水野さん「長野豪雨での恩返しを」



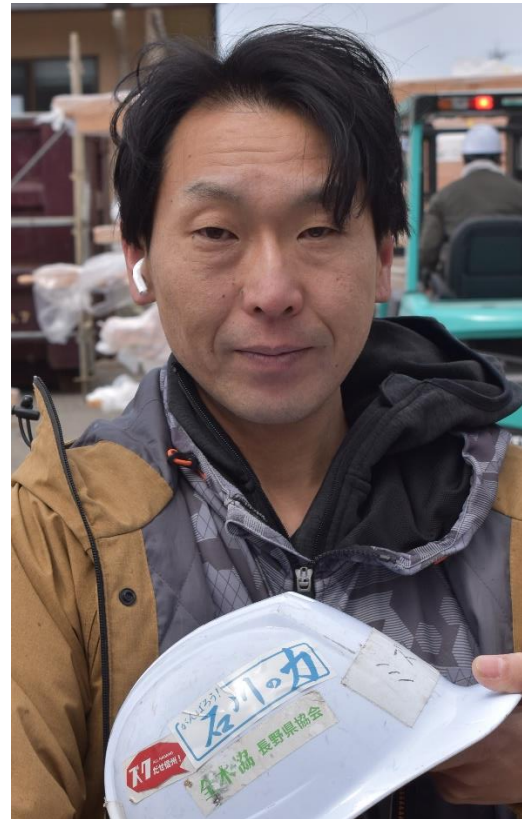
富山県連・梧桐秀貴さん(47歳)

富山県でも経験したことのない被害が出ているが、能登ではより深刻な被害状況になっている。被災者を少しでも手助けできればと考えて参加した。

昨日輪島市内で宿泊した際に、道中や市内の建物の倒壊を目にして驚いたと同時に、避難を迫られている住民の方々の心情を思うととても悲しい気持ちになった。就労の要請には可能な限り応えていきたい。

作業では初めて会う大勢の人と一緒に作業をしているが、同じ県、同じ大工ということもあり、意思疎通も取りやすく想像よりも働きやすい環境。

被災者を思い、仮設ではなくしっかりとした住宅を手掛けるつもりで作業し、いい家にしていきたい。



長野県建設労連・水野慎太郎さん(39歳)

長野から5～6時間かけて駆けつけた。ヘルメットに今回提供された「がんばろう！石川の力」のシールを「全木協長野県協会」のシールに加えて貼ることができ、歴史が加わった。

応急仮設木造住宅建設に参加するのは、長野に続いて2回目。当時は被災した立場でもあり、県外の人が大勢来てくれて感激したことを覚えている。災害復興支援には、機会があればぜひ参加したいと考えていた。熊本の時は都合がつかなかったのが、今回参加できて良かった。

仮設の作業は、皆の力、大工の力を感じる。16歳から大工をやっているが、こうして困っている時に力になれることを誇りに思う。